

『清浄道論』における刹那定

金 宰 晟（正圓）

1. はじめに

『清浄道論』（Visuddhimagga, 以下 Vism）の内容は、周知のように戒・定・慧の三学として構成されている。そして、この三学はさらに、戒清浄（＝戒学）・心清浄（＝定学）・見清浄・度疑清浄・道非道智見清浄・行道智見清浄・智見清浄（以上五清浄は慧学に該当する）の七清浄によって詳しく分類され説明されている。

本論稿では、定学の中で刹那定（khaṇika-samādhī）という定を取り上げ、この刹那定が純観行者（suddha-vipassaka あるいは, sukkha-vipassaka）という修行者と如何なる関係があるかを考察する。

2. 三つの定

Vism でまとめられている禅定論の特異な点の一つは、三つの定が述べられ¹⁾、いわゆる止行者と観行者が依り所とする定がはっきり区別されていることである。止行者と観行者が依り所とする定に関するこのような区別は、Vism やその註釈書の Paramatthamañjūsā（『第一義宝函』）では、じめて明確に提示されている。その三つの定とは、四禅・八禅のような完全に精神集中に没入している状態の定（appanā-samādhī, 安止定）、安止定に近づいている状態の定（upacāra-samādhī, 近行定）、心が瞬間的に集中している状態の定（刹那定, khaṇika-samādhī）²⁾ 三種類の定である。これらの三つの定の中で安止定と近行定を先に修習する修行という者を、精神集中を主に修行道として用いる修行者という意味で止行者（samathayānika）と呼ぶ。これに対して、刹那定によって心が安定し（cittaṃ samādhīyati）、心身の様々な現象（法）を無常・苦・無我として観察する修行を行なう修行者を観行者（vipassanāyānika）と呼ぶ。ここで、如何なる禅定によって修行を行なうかが、止行者と観行者という修行者の区別と直接に関わっていることが分かる。

3. 阿羅漢になる四つの道

三つの定の分類とその名称は、Vism やその註釈書をふくめた pāli 註釈文献において始めて明確に述べられているが、阿羅漢になることが最高の目的であった初期仏教や部派仏教の思想体系の中では、Nikāya の成立の段階ですでに、次のような四つの阿羅漢に至る道が整理されていることが確認できる。阿羅漢になる四つの道は、最初に僧支部の「行品」(AN vol. 2, pp.149-157) で提示され、『無碍解道』の「俱存品」(Paṭi vol. 2, pp.92-105) や Vism にそのまま引き継がれている。すなわち。

(1) 止を先に行なって観を修習すること。(2) 観を先に行なって止を修習すること。(3) 俱存の止観を修習すること。(4) 法に対する様々な想い(掉挙)によって捉えた意があり、その心が内(自己心身の心身)にのみ正しく住し、正しく止まり、一つの対象(一境)に向かい、等持する時、彼に道が生じる。とある。この四つの阿羅漢に至る道の中で、四番目の道は、法に対する観察を行なう観修習のために、落ち着いていない心を定によって安定させ、阿羅漢道を得ることが描かれている。即ち観修習を行う時、観察による掉挙を定の力によって安定させると道が得られることが説かれている。ここでの定が上で考察してみた三つの定の中でどれに該当するかは何も述べられてないが、利那定と純観行者との関わりに関する次の考察をみれば、観行者が依り所とする定は、利那定であることが明らかになると思われる。

4. 利那定と観行者

禪定の主題として Vism で提示されている40項目の業処の中で、六随念(仏随念・法随念・僧随念・戒随念・捨随念・天随念)・死念・寂止随念・食厭想・四界差別という10項目を業処とする場合、初禪から第四禪の安止定には到達できず、欲界定としての近行定しか得られない。これらの、安止定には到達できない近行定は、観修習と関係が深い利那定としての作用をすることもある。六随念等の十種の業処によっては、最初から安止定には達することができない近行定しか得られないから、この近行定を利那定として理解しても無理ではない、特に、純観行者が四界差別を行なう時には、近行定しか達することができない四界差別という業処は、直接的に観修習とつながっている³⁾。観修習の根拠になる定は、利那定であるから、この場合は、四界差別によって得られる定は、利那定であると言っても無理

ではないと思われる。すべての近行定が観修習に結び付いている利那定ではないが、ある近行定は利那定としての役割を果たしていると考えられるのである。

以上のように、止行者と観行者は、各々近行定・安止定と利那定を依り所にして修行の向上をはかっていることが確認できた。そして、両者は以下のような修行道をふんでいることが分かる。

「止行者にとっては、近行定と安止定との定がなくしては、他方（の観行者）によっては、利那定がなくしては、また（止行者と観行者との）両者によって（三）解脱門がなくしては、出世間を獲得することはありえない。それ故に〈三昧と観を修習して〉といわれたのである」（Vism-mhṭ[m]p. 27, Vism-mhṭ[n]p. 17）

5. むすび

このように止行者と観行者は、各々近行定・安止定と利那定を基盤にして修行が向上することが分かる。近行定・安止定に依らない観行者は、利那定という観修習の根拠になる定を依り所にして修行が向上して行くことが、Vism で明確に述べられているのである。

《Pāli Text の略語は、Critical Pāli Dictionary (CPD) Vol.1 の Epilogeomena 参照》
Vism-Visuddhi-magga, PTS, Vols. I - II, 1920-21. Reprinted in one vol., 1975.
Vism-mhṭ-Visuddhimagga-Mahāṭikā (Paramatthamañjūsā).

[n] (Indian ed.) Rewatadhamma ed., Buddhaghosācariya's Visuddhimagga with Paramatthamañjūsāṭikā of bhaddantācariya Dhammapāla, Vols. 3 (Devanagari), Varanasi, 1969, 1972.

[m] (Mizuno ed.) Romanized ed. by Mizuno Kogen. (based on Thai Royal ed. and Burmese ed., P.G. Mundyne Pitaka Press)

- 1) Vism p. 144. tividham samādhim paripūreti, khaṇikasamādhim, upacārasamādhim, appanāsamādhin ti.
- 2) 利那定の定義は、「利那的にのみ存続する定」（khaṇamatṭhitiko samādhi）である。（Vism-mhṭ[m] p. 819, Vism-mhṭ[n]p. 614）
- 3) 四界差別が純観修習 (suddhaviṣṣanā-bhāvanā) と深い関係があることが述べられている。それは、観智の展開の中で、見清浄に該当する名色区分智を説明するところで記述されている。その内容は次のようである。

「また純観行者あるいは、この止行者は、四界差別において説かれているそれぞれの界の把持門の中のいずれかの門によって、簡略にあるいは詳細に四界を把持する」（Vism p. 588）

〈キーワード〉 Visuddhimagga, Khaṇika-samādhi, 利那定, 観, Vipassanā

（東京大学大学院）